

「石川県のろう教育史と人物」

美多 哲夫（石川県金沢市）

石川県立ろう学校の沿革

明治41年1月11日、上森捨次郎が金沢市西町・公会堂の一室を借りて、私立金沢盲啞学校を開設、当時育生11名、啞生9名、同年7月に北陸訓盲院を本校に合併

大正2年4月、私立金沢盲啞学校の経営を石川県教育会に移して、上森校長退任

大正11年4月、金沢市長町5番丁に石川県立盲啞学校開校で、金沢盲啞学校廃校

大正13年4月、石川県立盲学校・聾啞学校に校名分離、殿町の旧金沢病院舎に移転

大正14年9月、金沢市兼六会館にて盲啞教育講演会を開催（東京盲町田校長、名古屋盲啞橋村校長、西川口話法研究所長出演）

大正15年4月、新入生18名より純口話式の教育を開始

大正15年11月、金沢市小立野上弓ノ町の新校舎へ移転

昭和12年6月、ヘレン・ケラー女史が来校

昭和19年4月、中等部を設置、これまでは京都府立聾啞学校や愛知県立聾学校に進学

昭和23年4月、石川県立ろう（漢字制限のため）学校に小学部・中学部・高等部を設置、高等部職業過程として理容科・被服科を設置

昭和26年9月、盲・ろうの完全分離で、ろう学校を石川郡松任町（現松任市）に移転する計画があったが、児童生徒の通学難を理由にPTAが反対して取り止めとなった。

昭和38年4月、高等部に木材工芸科を新設

昭和39年4月、幼稚部を設置

昭和40年7月、現在地の金沢市窪町に新校舎完成、移転して盲・ろうが完全分離

昭和48年4月、隣接の老人施設を改装して、幼稚部移転

昭和50年4月、高等部に普通科・専攻科（被服科・産業工芸科）を設置

平成10年、幼稚部から全校的に手話導入

★平成20年に創立100周年を迎える。

松村精一郎（まつむら・せいいちろう）

石川県に盲・ろう教育が開始されたのは明治13年のことで、我が国で最も早いといわれる京都盲啞院の創立が明治11年であるから、相当に早かったのである。

富山県福光出身の松村精一郎は12歳の時耳を患い、不幸にも聾者になってしまった。然し、彼は自己の不幸にめげず大いに発奮し勉学に努め、長じて自分と同じ不遇にある聾啞者や盲人に教育を施してやろうと考え、明治13年に金沢市長町川岸に金沢盲啞院を開設した。当時は未だ一般普通教育でさえ発足して10年もたっていない頃であり、盲啞院に対して世間の関心は極めてうすく、盲・ろう児をもつ家庭の人々でさえ、自分の子弟を入学させようとせず、盲啞院の生徒数は4、5名しかない有様で、学校経営は困難となり、開校2年で金沢教育社に経営をゆずった。この教育社も間もなく解散するに及んで、金沢盲啞院は遂に閉校の悲運にあい、最終的に明治20年に学校財産の処分をもって、完全に学校は消え去ったのである。

これから20年間は盲・ろう教育は全く空白の状態となり、このため石川県は他府県に比べていちじるしく遅れをとってしまい誠に残念なことであった。この空白期間に、全国各地に続々と学校が開設されていたのである。

★現在、金沢市広坂のふるさと偉人館の展示パネルに、松村精一郎・教育者の文字が記されている。その他詳細は、富山県・橘勇一氏の研究にゆずる。

上森捨次郎（かみもり・すてじろう）

金沢市会議員とし全国各地を視察し、本県の盲・ろう教育が他府県よりいちじるしく遅れていることを痛感し、まず公立の盲啞学校の設置を力説し、その実現に奔走したが、県でも市でも未だそれを認める情勢ではなく、彼は自説が容れられないのを遺憾として独力で学校開設を決意し、明治41年1月11日金沢市西町の市公会堂の一部を借りて、私立金沢盲啞学校を創立した。大正2年3月31日、私立金沢盲啞学校の経営を石川県教育会に移して、校長を退任した。

改田 弥作（かいだ・やさく）

京都盲啞学校出身、石川県立聾啞学校の教員、日本聾啞協会石川部会の幹事長
大正11年4月、石川県立盲啞学校の教員となる。聾啞部教員は伊東教頭と2名のみ。
大正13年4月、石川県立盲学校・石川県立聾啞学校に校名分離
昭和6年6月、日本聾啞協会石川部会の中心になっていた改田弥作も手真似科生徒の激減のため、やむなく退職させられ、木工で生計を立てる。
石川県立聾啞学校交友会と日本聾啞協会石川支部の共同発行の会報に、鈴木忠光作の詩が掲載されている。

『改田弥作先生に送る』

前後十三年／君は／石川校のために／働けり
十年一日の如くとは／げに／君の如と
事ある日も／事なき日も／黙々として／勤めたり
君は／吾が校に於ける／唯一人の／聾啞の教員
されば／生徒等は／君を慕い／卒業生亦／誰よりも／君を／慕へり
君なきあとの／母校は／寂しかるらん
物言はぬ／人の子は／特に／さびしかるらん
されば／月に三度／日に三度／来たりて語り給え／手にて語り給え
物言はぬ／人の子は／誰よりも／君をば／待たん
何よりも／君にや／縋らん

鈴木 忠光（すずき・ただみつ）

佐藤在寛の函館商船学校講師時代の教え子で、後に彼が院長に就任した盲啞院の教員になり、昭和の聾啞教育、聾啞者運動に特異な事績を残した。
明治33年 秋田県面潟村（現八郎潟町）に生まれる。
大正6年4月、函館商船学校に進学、講師の佐藤在寛より影響を受ける。
大正14年4月、佐藤在寛をたよって函館盲啞院の教員となり、名古屋で開催された聾教育口話法の講習会に参加する。女生徒と恋愛で佐藤在寛に破門され、わずか1年で退職する。後に女生徒・時子と夫婦で札幌盲啞学校の教員となる。
昭和4年4月、石川県立盲啞学校の教員（訓導）として就任のため、金沢に移住する。日本聾啞協会石川部会に時子が入会する。
昭和5年1月、時子が男児を出産して間もなく死去する。同年4月に東京聾啞学校師範部出身の岡五月を後妻に迎える。忠光は石川部会の賛助会員として入会して、翌年に役員と手話通訳を引

き受けて以来、昭和40年代まで献身的な活動を続ける。

昭和23年5月、大阪・高橋潔との交流で全日本ろうあ連盟の発足に役割を発揮する。

昭和24年9月、定年を前に突然石川県立ろう学校を退職する。忠光は佐藤在寛・高橋潔と同様に口話教育の行き過ぎを批判し、手話を擁護する立場から、同年4月に同校の教頭に赴任した石黒晶らと教育法をめぐる激しく対立し、孤立無援であった。

昭和34年10月、金沢市で第9回全国ろうあ者大会の開催に尽力する。

昭和35年10月、石川県ろうあ協会を発展的解消して、財団法人石川県聴覚言語障害者福祉協会の設立に尽力する。

昭和40年4月、東京で日本ベル福祉会館が完成し、金日ろう連の事務室で出版局の東京総局長として竹島昭三郎事務所長とともに事務一切を執る。

昭和41年4月、妻五月が死去。ベル会館の経営に疑問を持ち、全日ろう連の緊急理事会開催を要請するが、連盟が会館事務局長の説明を鵜呑みにして逆に追われる。

昭和42年6月、松山市で開催の第16回全国ろうあ者大会を最後に、全日ろう連理事の任期切れでろう運動の表舞台から姿を消す。

昭和55年3月、東京にて80歳で亡くなる。金沢市で初めて聴覚障害者協会葬が営まれ、永年の教育と運動の功績が再評価された。

★鈴木忠光は元ろう学校教員で手話通訳を務めながら、地元ろうあ協会役員と全日ろう連理事を長く務めたことは不思議に思われるが、地元役員の話によると、忠光は右耳が難聴であって、本人の申告でろう協の会員になり、役員を続けたということである。

忠光は地元石川県ろう協の選出で全日ろう連の評議員になったうえで、理事に選出されて8年間務めたのであるが、任期切れの年はベル会館問題に関わって東京で生活していたことと、地元で若手が台頭して世代交代が進んでいることで、地元選出から外れて不本意な引退となったのである。

筆者は昭和40年から地元のろう運動に参加して、忠光が引退するまでの2年間いっしょに活動していた。

石黒 晶（玲）（いしぐろ・あきら）

元福井聾学校長で、教科書「国語初歩」や聾教育振興会の機関誌「聾口話教育」の編集に関係して口話法の研究と教育に活躍した。

大正14年7月、名古屋市立盲啞学校を会場として開かれた文部省主催聾教育口話法講習会に参加、西川吉之助・川本宇之介らの指導を受ける。

昭和4年、日本聾口話普及会の機関紙「聾口話教育」の編集、音韻の組織図と発音指導体系として発音基本練習表（パバマ表）を発表

昭和24年4月より27年3月まで、石川県立ろう学校教頭に赴任、その後福井県立ろう学校校長を長く務める。

昭和29年、発音と読話の指導のための記号・口形文字を発表

★晩年は金沢市で、ろうあ協会会長の相談相手になるが、90歳以上の高齢で亡くなる。

鈴木 重忠（すずき・しげただ）

鈴木忠光の次男で、金沢大学医学部耳鼻咽喉科言語外来で文字と手話の早期導入による「金沢方式」を開発した。ろう者が出入りする家庭で育ったため、手話に堪能である。

昭和6年9月、鈴木忠光・五月の次男に生まれる。

昭和32年5月、千葉県立千葉聾学校教諭となる。

昭和39年4月、千葉県教育委員会派遣長期研修生として金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室で研修。
この間、アメリカ合衆国へ言語治療、難聴教育の視察に1ヶ月赴く。

昭和40年5月、金沢大学医学部耳鼻咽喉科言語外来を担当するが、身分は何の保障がない研修生であった。ろう者の典子と結婚。

昭和49年4月、同助手となり、金沢方式を開始する。

昭和59年 日本言語療法士協会初代会長になる。

昭和60年7月、医学博士号を取得して、同講師となる。

平成4年11月、金沢方式マニュアルを出版。

平成5年 脳梗塞に倒れ、療養生活のまま定年退官し、平成15年10月に亡くなる。

★「金沢方式」の特徴は、文字言語や手指（手話と指文字）言語を音声言語と同時期から刺激し、初期の良好な親子コミュニケーションが成立し、最終的に音声言語を発達させようとするものである。並行して指導している音声言語の発達に伴い、手指法は消失傾向を示し、5・6歳には音声言語のみを使用するようになる。

毎週1回の個別指導とホームワーク（家庭教育）で行われるが、手指法は日本語に対応して、読み書き能力を高める。インテグレーションして大学まで進学した難聴児が多い。

富山ろう学校教諭の田中靖恵、元和歌山ろう学校教諭で青年海外協力隊として、アフリカ地域のザンビア共和国で聴覚障害児の支援に取り組む、加藤嘉文も「金沢方式」の出身である。

現在は、鈴木重忠の弟子・能登谷晶子助教授が「金沢方式」を引き継いでいる。

大塚 明敏（おおづか・あきとし）

昭和50年 松沢豪のあとを受けて、松崎節女とともにNHK教育テレビ「NHKテレビ ろう学校」の番組を担当する。

昭和58年から平成4年までの10年間、金沢大学教育学部教授に赴任して、聴覚障害児の言語教育にあたる。

その頃から、ろう学校の幼稚部から地域学校にインテグレーションする児童が増える。

金山千代子（かなやま・ちよこ）

昭和3年 大阪に生まれる（3歳から金沢に住む）

昭和23年 石川県立石川師範学校女子部本科卒業

昭和23～24年 石川県公立学校教員（小学校教諭）

昭和25～27年 石川県立ろう学校教諭、石黒晶の指導を受ける

*昭和25～26年 石川県内地留学制度による現職留学

昭和26年 東京教育大学国立ろう教育学校本科修了

昭和27～45年 東京教育大学附属ろう学校教諭

昭和45～平成5年 財団法人小林理学研究所「母と子の教室」室長

平成14年4月 基本的考えと指導法をまとめた「母親法」を出版

財団法人小林理学研究所の補聴研究室では、昭和45年から金山千代子が主任として「母と子の教室」を設け難聴乳幼児について検査と相談に応ずるほか、乳児とその母親の指導を行い、成果をおさめる。対象は、当初零歳から小学校就学までの一貫教育をしていたが、近年、3歳未満児とし、1期間（3か月～4か月）15回、補聴器使用の訓練を実施するが、幼児の発達には家庭教

育が影響するので、母親に補聴訓練の方法や難聴乳幼児の扱いなどを指導している。

この方法は、クリニック方式と呼ばれ、聾学校や難聴学級ではなく、一般の幼稚園の教育と並行して行われるところに特色がある。そして、早期教育と聴能教育を徹底させて、健聴児との統合教育の可能性を拡大したものとして貴重である。

加藤 嘉文 (かとう・よしふみ)

石川県辰口町生まれ、生後間もなく聴覚の障害が見つかり、1歳半から金沢大学医学部耳鼻咽喉科言語外来の「金沢方式」で言語訓練を受ける。小学校からインテグレーションして、大阪教育大学で障害児教育を学ぶ。

平成5年に特殊教育特別専攻科の卒業論文「障害児のインテグレーション研究の動向」

和歌山ろう学校教諭を7年間務めたあと、平成15年7月に国際協力事業団（JICA）青年海外協力隊として、アフリカ地域のザンビア共和国の国立ろう教育センターで17年3月まで、聴覚障害児の支援に取り組む。

武居 渡 (たけい・わたる)

手話言語獲得過程に関する研究、手話能力の評価に関する研究、就学経験のない高齢聾者の身振りに関する研究で、石川県立ろう学校の早期手話導入に大きな影響を与える。

昭和46年7月生まれ

平成2年 都立国分寺高校より筑波大学第二学群人間学類入学

平成6年 同大学卒業、筑波大学大学院博士課程心身障害学研究科入学

平成11年10月 金沢大学教育学部講師として赴任

平成14年4月 同大学助教授、障害児教育講座、言語・聴覚障害教育コースの講義を主に担当
研究論文に

ろうの両親を持つ乳幼児の手話言語獲得過程に関する研究

離島に住む成人聾者が自発した身振りの形態論的分析

乳児の指さし行動の発達の変化－手話言語環境にある聾児と聴児の事例から－

聾児の言語獲得に関する文献的考察－手話言語獲得の側面から－

などが知られている。

ろうの両親をもつコーダで、手話に堪能である。

[参考文献]

石川県立ろう学校創立70周年記念誌

手話・口話論争の時代と手話を擁護した人々（市立名寄短期大学・清野茂著）

聴覚障害乳幼児の新しい言語療法（金沢方式マニュアル）

母親法（金山千代子著）

日本聴力障害新聞

★今回は、文献での調査を中心に作成したが、今後は調査が不十分な改田弥作・石黒晶について、関係者の聞き取りに重点をおいて、さらに詳細な記録にまとめたと思う。